

# 黒潮ラインをゆく ~その2~



前回は続き、秋風のさわやかな真道海岸を、黒潮ラインを更に求めて散策。今回は浜改田の琴平神社から久岐の海岸までを紹介いたします。

▲黒潮ライン南国市東端は“なぎさリフレッシュ”やトリム広場の整備が進み、子供の遊び場、また、若者のデートスポットなどとして、市民の憩いの場となっています。(写真はトリム広場)



◀戦国時代、田村城主細川守護代の管下で、前浜、久岐方面を領した千屋氏の居城跡。また、千屋城跡南側外堀の土壁上には医学、和漢学などに通じた学者、野見嶺南の墓所があります。



販売している中田遊亀さん(六十一歳)を訪ね、お話をうかがった。原料のジャコは、漁師と加工業者との価格交渉、札入れである。兵で扁平な石を拾い、それに入札価格を石で書いて相手に渡す。洗濯の時に時々この石がポケットから出てきて、奥さんが困ることがある。買入れたジャコは、ただちに水洗いし、生(どろめ)で販売する分を除き、大きな釜で煮出す。この塩かげんが難しく熟練を要する。昔は薪で煮たが、最近ではバーナーなど機械化が進んでいる。この塩ゆでされたジャコを天日で自然乾燥させてチリメンジャコのでき上がり。塩ゆでの汁は、「いりじろ」といって煮物のダシとして重宝され、特にタケノコを煮ると抜群においしいそうだ。

一月から三月まではパッチ網漁ができない(禁漁期間である)ため、昔ながらの地引き網漁が行われる。最近ではテトラポットが入り、浜辺も以前の面影はないが、テトラとテトラの間を利用して、地引き網が引かれる。ここ数か月は漁が少ないとのことだが、土佐湾で取れた、新鮮でカルシウム豊富なとろろあ、チリメンジャコ。いつまでも我々の食卓をにぎわしてもらいたいものだ。

## 前浜の砲台跡

江戸時代の享和六年(一八五三年)アメリカの黒船四隻が浦賀に来航し、幕府は諸藩に海防を命じ、土佐藩でもこれに従って、須崎、浦戸、種崎、前浜などの要所に砲台を築くことになった。

## 琴平神社

社伝によると、現在の位置より七里南沖にとつかうの峯・黒崎があり、五穀豊じょうの黒崎宮があったが、白鳳大池震(六八四年)により黒田郷と共に陥没したので、そのとき琴平山へ神移した。里人は金比羅大権現と称えた(明治元年琴平神社と改称)……と伝えられている。



全国に六百八十三社ある琴平神社のなかで、その創建は香川県琴平町の金比羅権(七〇一年創建)よりも古いのでは、と言われている。祭神はもともと大物主命であったが、後に崇徳天皇を合祀。現在、香北町の美良布神社と共に、県下の壮麗な神社の双璧とされている。

## 蚊居田城跡

三和小学校南方二百呎の所に、南朝方の武将新田義貞の系譜につながら



前浜里の教育者大原里勝は、砲台築構にあたって披露され、安政元年(一八五四年)ホインスル砲数門を備えつけ砲台は完成した。結局、土佐に黒船は来航しなかったが、現在では、雄大な太平洋を前に台座のみが保存されていて、当時を忍ばせている。南国市指定史跡である。

## 戦争の落とし子「掩体」

高知海軍航空隊の飛行場は、戦争たけなわの昭和十六年、三島村民を強制的に退去させ村のシンボルであり、度々の洪水から村民の命を救った命山を削り取って造られた。そして、赤とんぼと呼ばれた練習機が日夜騒音を轟かせて飛びかうようになった。空襲も激しくなると、敵機の攻撃から飛行機を守るための掩体(こうの)



る蚊居田(中津)氏の城跡がある。二代中津重清は、守護代細川氏に属して二千貫を領した。六代重芳は、性を蚊居田と改めた。蚊居田三代重隆は、戦国武将として武勇の誉れが高く、長宗我部元親に支えた。六代重久は山内家に支えて姓を口澤に復した由。雑木の生い茂る城跡には、栄枯盛衰の世を果てしなく見つめるかのよう。城八幡の小さな祠が祀られていた。



## 浜改田のチリメンジャコ

浜改田のチリメンジャコの漁・加工・販売は大正時代から行われており、当時に比べると漁業者、加工販売とも減少しているものの、現在でも引き続行われている。静岡、宮崎や瀬戸内などでもジャコに取れ、加工されているが、市場で一番高い評価を受けるのは土佐湾で取れたもの。これは土佐の荒波にもまれて育ったため、最高の品質のものである。この土佐神の「どれだち」のチリメンジャコを加工・

建設が急がれ、県内の中学生が動員された。学生たちは、連日授業もなく、空腹をかかえて、掩体とそれに接続する誘導路建設の勤労奉仕に精出したのである。昭和二十二年には、アメリカ海軍の艦載機グラマン百機余りの波状攻撃を再三に渡って受けたが、作業中の学生たちは、この掩体に逃げこんで身を守ったこともあった。掩体は、三十ほど造られたが、高知航空隊には、練習機以外に格納する飛行機は無かったようである。戦後、軍用飛行場は、高知空港として姿を一新し、県の空の玄関となったが、コンクリート製の掩体は取り壊されることもなく、人々の様々な思いを秘めて五十年……。今では農家がたまに物置代りに利用するだけの戦争の落とし子である。